

幼小の円滑な接続を意識した 「総合的な学習の時間」に関する一考察

前 川 憲 正

1. はじめに

小学校における総合的な学習の時間は、変化の激しいこれからの社会に対応できる「生きる力」をはぐくむことを目指して、平成10年（1998年）の学習指導要領改訂において創設された新しい学習の時間である。平成15年（2003年）、平成20年（2008年）2度の改訂を経て、今回の平成29年（2017年）改訂に至っている。これまで継続して、総合的な学習の時間は、学校が地域や児童の実態等に応じて、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習とすることと同時に、探究的な学習や協働的な学習とすることが重要であるとしてきた¹。

また、この時間の学習を行うにあたって配慮する事項の一つとして、グループ学習や異年齢集団等による多様な学習形態や、地域の教材や学習環境の積極的な活用等について工夫することが挙げられている。さらに、子どもの発達や学びの連続性という観点から、総合的な学習の時間においても、幼稚園と小学校など学校段階間の円滑な接続の充実を図ることが、より一層重要になってくると考える。

本稿では、そうした観点から、執筆者が勤務した大阪市立大江小学校での、隣接する幼稚園との連携を生かした総合的な学習の時間の実践事例をもとに、今後のこの時間における探究的な学習の在り方と幼小連携の在り方について考察と提言を行うものである。

2. 総合的な学習の時間の現状と学習指導要領改訂の経緯

最新の学習指導要領では、総合的な学習の時間のねらいは、学校が地域や児童の実態等に応じて創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、身の回りの様々な生活や社会状況から児童が自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく課題を解決する資質や能力を育てること、課題の解決に主体的・協働的に取り組む探究的な学習を通して、学んだことを自己と結び付けて自己の生き方を考えることができるようにすることにある。また、今後、論理的思考力やコミュニケーション能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の実社会や実生活で生きて働く資質・能力を児童にはぐくむためには、総合的な学習の時間を探究的な学習とすることがますます重要となってくる²。

しかし現実には、学校によってその取り組みに大きな差が見られるようである。中には、児童が自らの生活や周りの社会状況から自ら課題を見付け、見通しを持って主体的に解決に取り組んだり、自分たちの取り組みを振り返って、よりよいものに改善していったりというのではなく、単発のイベントに終わってしまっていたり、教科学習や特別活動等との違いが明確になっていなかったりという例も少なくない。

今回の学習指導要領の改訂では、これまでの成果として、探究的な学習活動に取り組んでいる児童生徒の割合が増え、探究のプロセス（①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現）を意識した学習活動に取り組んでいる児童生徒ほど各教科の学習にもよい結果が現れている³とする一方で、総合的な学習の時間を通して、どのような資質・能力を育成するのかということや、総合的な学習の時間と各教科等との関連を明らかにするという点については学校により差があること、探究のプロセスの中でも「③整理・分析」、「④まとめ・表現」に対する取り組みが十分とはいえないことなどの課題が挙げられている⁴。そのような課題を踏まえ、改めてこの時間の特質と育成を目指すべき資質・能力を明確にするために、次のような目標が示された。

【総合的な学習の時間の目標】（平成 29 年告示小学校学習指導要領）

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。〈知識及び技能〉
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。〈思考力・判断力・表現力等〉
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。〈学びに向かう力・人間性等〉

今回の改訂においても、この時間の学習における問題解決的な活動のなかで、図 1 に示したような探究的な学習が一層重視されたことに違いはない。

この学習の中で、児童は①日常生活や社会に目を向け、自らの疑問や関心に基づいて課題を見付け、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③その情報を整理したり分析したりして問題解決に取り組む、④その

中での気づきや発見、自分の考えや意見などをまとめ、自分なりに表現し、そこからまた新

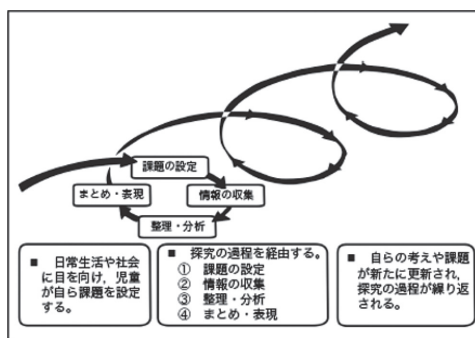


図 1 探究的な学習における児童の学習の姿⁵

たな課題を見付け、さらなる解決に取り組むという学習活動を発展的に繰り返していく⁶。

先述したように、この探究のプロセスの中でも、今後は特に「③整理・分析」、「④まとめ・表現」の段階で児童の主体性や創造性をいかに発揮させるかということが重要となる。

3. 幼児教育と小学校教育の違いと関連

平成 29 年告示幼稚園教育要領においても、幼児教育の内容として「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の 5 領域が示されている⁷。この 5 領域の内容は、それぞれ独立しているものではなく、子どもの自発的な遊びを通して総合的にはぐくまれるものである。

一方、小学校の学習指導要領では、教科等に分かれており、それぞれの目標や育成を目指

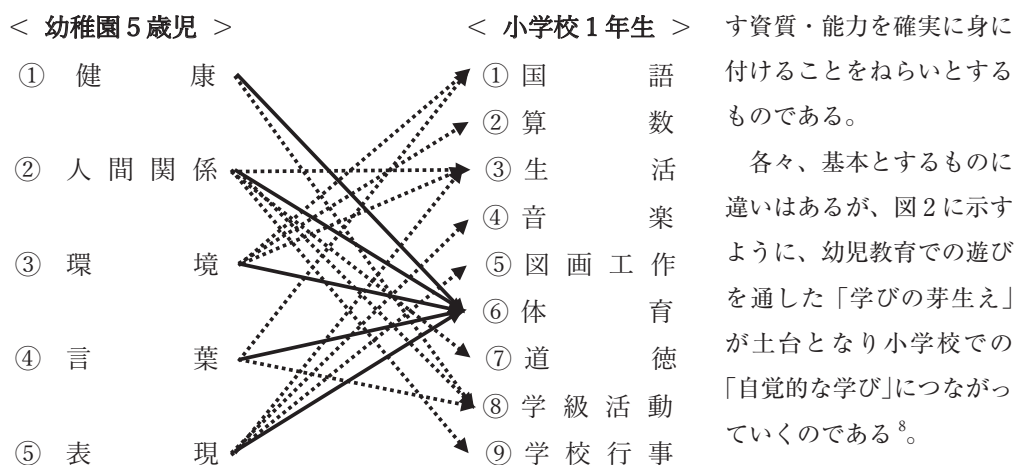


図 2 幼稚園教育の内容と小学校教育の内容との関連

(平成 28 年執筆により作成)

びと行動し、充実感を味わう」「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」「健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する」ことができる子どもを育てることであり⁹、主に「心情・意欲・態度」が中心である。これに加えて、小学校体育では、「分かる・できる」という「知識・技能」や「方法を工夫する・他者に伝える」という「思考・判断・表現」についても明確な達成目標が示されている。しかし、「健康」のみならず、幼稚園で身に付けた「人間関係」「環境」「言葉」「表現」に関する力も、小学校の体育に大きくかかわっているのである。

次ページの図 3 は、ある日の幼稚園の運動遊びの内容と小学校 1 年体育の各領域との関連を示したものである。園児たちは、洞窟探検や坂道遊び、鬼遊び、ダンスなどの運動遊びを、ただ夢中になって楽しんでいるだけである。しかし、その遊びを通して、歩く、這う、走る、跳ねるという動きや、バランスをとる、用具を操作する、リズムをとるという感覚、一緒に遊ぶ友達との仲間意識や競い合う態度といった総合的な力が小学校 1 年の体育のそれぞれの領域の動きや学び方に確実につながっているのである。

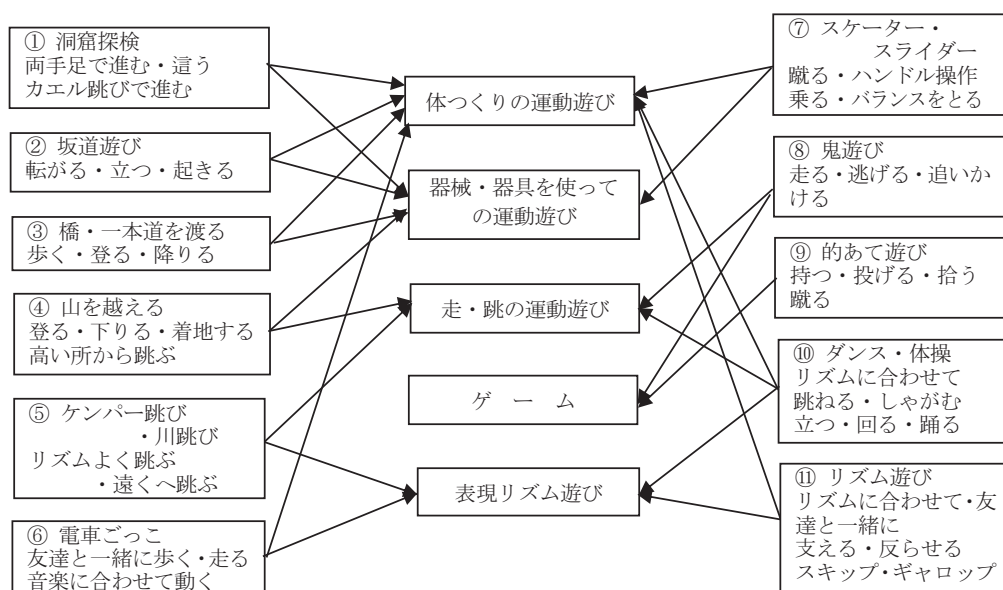


図3 幼稚園の運動遊びと1年体育との関連（平成28年執筆により作成）

実際、「走る」「投げる」「跳ぶ」などの動きは勿論、幼稚園の運動遊びで経験した「クマ歩き」「ウサギ跳び」「ケンパー跳び」「ツバメさん」などの運動感覚は、小学校低学年における動きの基盤（感覚づくりの運動）となっている。

このため、小学校と幼稚園の教師が常に児童や園児について意見交換を行ったり、互いの事例を持ち寄って話し合ったりすることを通して、小学校においては、子どもの学びがどのように培われてきたのかを理解して、幼稚園においては、その学びがどのようにつながっていくのかを見通して連携した指導を行うことが重要になってくると考える。

次に、こうした幼稚園での運動遊びと小学校での体育のつながりを生かし、幼小の円滑な接続を意識した総合的な学習の時間の実践について、執筆者が勤務していた大阪市立大江小学校の取り組みをもとに考えていきたい。

4. 大阪市立大江小学校の実践事例

大江小学校は、大阪市の中心部にありながら、校区内には四天王寺をはじめ伝統ある寺院や神社が多く、創立147年を迎える歴史と文化にあふれた学校である。地域住民の繋がりが強く、学校教育への関心も高い。また、隣接する大江幼稚園には児童の弟や妹が多く在籍しており、遊びや生活の中でも日常的な交流が見られる。

こうした学校の特色を生かして、郷土の伝統と文化を尊重し、自ら育った地域を愛する心情を児童にはぐくむとともに、これからの自己の在り方を考え行動できる力をはぐくむこと

を目指して、平成 14 年度（2002 年度）から生活科・総合的な学習の時間の中で『はぐくみタイム』に継続して取り組んでいる。近年では、学校教育目標「豊かな心で、自ら考え判断し、すすんで行動する子どもを育てる」の実現を目指し、学年の実態に応じて「地域の方々と街をきれいにしよう」「昔のおもちゃで遊ぼう」「折り紙を教えてもらおう」「地域の方とお話する会」「ペットボトルロケットづくり」「年長さんと交流しよう」「自然体験学習」「昔の大江の町について調べよう」などの活動に取り組んでいる。

5 年生は、この『はぐくみタイム』のなかで、隣接する大江幼稚園 5 歳児との遊びを通じた交流を年 4 回実施している。この活動に継続して取り組む中で、5 歳児にとっては小学校への親しみと期待感、5 年生にとっては自己肯定感や自己有用感の高まりが見られるようになることをねらいとしている。

次に、平成 31 年度（2019 年度）に行った 5 年生と大江幼稚園 5 歳児との遊びを通じた交流について、授業記録と聞き取りを通して執筆者が整理し、まとめた実践事例を紹介する。

（１）単元名 「まつ組さん・ゆり組さんと一緒に遊ぼう」

（２）単元について

本単元は、5 年生が大江幼稚園を訪問したり 5 歳児を小学校に招待したりして、一緒に遊ぶことを通して互いの心の交流を深めるものである。計画・立案・実施という一連の活動を通して探究的な学習を行うことで、年長者としての自覚が次第に高まり、年少者への接し方や活動の工夫の仕方など自らの考えがより明確になってくる。この学習を通して、目標を設定する力や課題を解決する力とともに、互いの考えを交流しながら協働して学ぶ力を高めていくことができる。児童は、自ら企画した「まつ組さん・ゆり組さんと一緒に遊ぼう」という活動に 5 歳児を招待して交流することを通して、自己肯定感や自己有用感を高め、友達とかかわり合いながら学ぶ能力や、異年齢の園児とかかわる能力も高めることができる単元であると考えている。

（３）児童・園児について

① 5 年 い組 28 名、ろ組 28 名

5 年児童は何事にも積極的に取り組み、最後まで粘り強くやり遂げることができる。

また、休み時間や放課後には積極的にボールゲームや鬼ごっこをして男女仲よく遊んでいる。

4 月には、大江幼稚園を訪問して 5 歳児と初めて接する機会を持った。今年 1 年間ともに活動する相手を決め、グループに分かれて互いに自己紹介した後、園児の好きな絵本や紙芝居の読み聞かせを行った。どの児童も園児に親切に接する態度が見られ、この交流を通して年少者への愛着心を持つことができた児童もいた。しかし、一部ではあるが、活動の中で自己中心的な面が見られる場面があり、相手の立場になって物事を考えたり、他人のために働いたり、気を配ったりすることができない児童も見られた。

② 5歳児 まつ組 23名、ゆり組 23名

園児は、年長組になりいろいろな活動に対して自分から進んで取り組もうとする姿や年下の友達に優しく関わろうとする姿が多く見られるようになってきた。また、体を動かすことが好きな園児が多く、園庭にある吊り橋やのぼり網などの固定遊具でいろいろな動きに挑戦して楽しんでいる。しかし、気持ちをコントロールしたり人と合わせたりすることが難しく、集団活動に参加しにくい園児も見られる。

大江小学校とは、これまでも様々な交流が行われており、昼休みに運動場で児童と一緒に遊んだり、校庭で運動会の練習を行ったり、1年生の給食や学習の様子を見たり、互いの学校行事を参観し合ったりしている。

(4) 活動にあたって

本単元の活動にあたって、自己中心的な面が見られる児童や集団活動への参加が難しい園児がいることを小学校と幼稚園の教師がともに理解し、共通の視点を持って指導・支援していくことが重要であるとする。

この活動を行う中で、来年6年生として5歳児を小学校に迎える立場の児童に、園児の気持ちや立場になって相手のことを考えた言動に気を配りながら活動することの大切さを学ばせていきたい。園児が楽しく活動する様子を見ることで、児童は人の役に立つ喜びや自分の存在の大切さに気づき、達成感や満足感を得ることによって、日常生活の中にも相手を思いやる行動が見られるようになることを考える。また、5年生の優しさや心遣いに接することで、すべての園児に友達と協力することの大切さや集団で遊ぶことの楽しさを味わわせていきたい。また、自他の行動を振り返り、自分の行動や考えを見つめ直し、自己のよりよい在り方を考えていく経験を通して、自立への基礎を育てていきたい。

5歳児との交流をより楽しくするためには、事前に園児の興味・関心の高いものを把握しておくことや5年児童の思いや願いを伝えておくことが必要となる。そのために、担任同士の情報交換や連絡調整をこまめに行っていくきたい。

園児は、これまでの経験や4月の交流を通して、「お兄ちゃんの名前を覚えたよ」「あのお姉ちゃんの紙芝居おもしろかったね」と親しみを感じ始めており、お兄さんやお姉さんともっと仲良くなりたいという気持ちも大きくなっている。5年生との4月の交流を思い出しながら、「お兄ちゃん、お姉ちゃん優しかったねえ」「次はどんな遊びがしたい？」等、次の活動に期待が持てるようにしたい。また、子ども同士の主体的な関わりを大切にできるように担任同士の連絡も十分にとりながら、ねらいや活動内容を確認し合い、共通理解を図るようにしていきたい。

(5) 単元で育てようとする資質・能力

【知識及び技能】

ア 課題の解決に必要な知識及び技能を身に付ける。

【思考力・判断力・表現力等】(学習方法に関すること)

イ 活動の見通しを持って、課題を見つけ目標を設定する。

ウ 相手に応じて、分かりやすく説明したり表現したりする。

【学びに向かう力・人間性等】(自分自身及び他者や社会とのかかわりに関すること)

エ 目標を設定し、課題の解決に向けて行動する。

オ 自己の将来を考え、夢や希望をもつ。

カ 他者の意見を受け入れ、協働して課題を解決する。

(6) 単元の目標

① 5年生

5歳児との交流活動を通して、相手意識や目的意識を持って活動することの大切さを
知るとともに、高学年としての自覚と責任を持って行動しようとする。

② 5歳児

小学校で5年生と交流することにより、小学校への興味・関心や5年生への親しみや
憧れを持つとともに、気づいたことや思ったことを言葉などで表現する。

(7) 単元計画 (全14時間)

◇ 出会いの場面を持ち園児を知る

4月(3時間)「まつ組さん・ゆり組さんに読み聞かせをしよう」

自己紹介をし合い、好きな本や紙芝居の読み聞かせをする。

・ 単元全体の見通しを持ち、活動のめあてを明らかにする。

・ 5歳児への優しい気持ちを大切にしようという気持ちを持つ。

・ 交流の見通しを持ち、活動の計画を立てる。

・ 交流を振り返り、6月の運動遊びの計画・立案に生かす。

◇ 知り合った園児とさらに親しくなる

6月(5時間)「まつ組さん・ゆり組さんと運動遊びをしよう」

5歳児を体育館に招いて、一緒に運動遊びをする。

・ 交流するための活動の仕方を工夫することができる。

・ 活動内容を話し合い、グループごとに準備をする。

・ 5歳児と一緒に運動遊びをする。(本時：2時間)

・ 交流を振り返り、7月のプールで遊ぼうの計画・立案に生かす。

7月(3時間)「まつ組さん・ゆり組さんとプールで遊ぼう」

小学校のプールで5歳児と一緒に水遊びをする。

- ・ 交流の概要を知り、活動の計画を立てる。
- ・ 5 歳児と一緒にプールで運動遊びをする。
- ・ 交流を振り返り、12 月のゲームで遊ぼうの計画・立案に生かす。

◇ 親しくなった園児に小学校への期待を持たせる

12 月（3 時間）「まつ組さん・ゆり組さんと自分たちが作ったゲームで遊ぼう」

5 年生がプログラミングで作成したゲームを使って一緒に楽しむ。

- ・ 活動内容を話し合い、グループごとに準備をする。
- ・ プログラミングしたゲームを使って 5 歳児と一緒に楽しむ。
- ・ 交流を振り返るとともに、入学に向けての話をする。

（ 8 ） 本時の活動（第 6・7 時）

① 本時の目標

（5 年生）・ 5 歳児の気持ちを考え、声をかけたり遊んだりすることができる。

- ・ 園児と仲良くなれた自分に気づき、喜びを感じることができる。

（5 歳児）・ 一緒に活動する中で、5 年生への親しみや憧れの気持ちを深める。

- ・ 交流を通して、気づいたことや思ったことを言葉などで表現する。

② 本時の展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 基 準
1 グループごとに整列して園児を迎える。 2 はじめの会をする。 (1) はじめの言葉 (5 年生) (2) 園児の言葉 (3) 校長先生の挨拶 (4) 活動の説明 (5 年生) 3 グループに分かれて運動遊びをする。 (1) 自己紹介をし合う。 (2) 一緒に遊ぶ。 ・ 動物になって ・ どこまで跳べるかな ・ ケンパー跳び ・ ピョンピョンくぐり	・ 明るい笑顔と拍手で園児を迎える。 ・ 相手意識をもって、安全に気を付けて活動するよう確認する。 ・ 互いに元気な声で挨拶ができるよう言葉がけする。 ・ ペアの園児と手をつないで一緒に話を聞くよう指示する。 ・ あわてず安全に気を付けて歩いて移動するよう意識づける。  写真 1 園児との運動遊びを通じた交流	園児の立場になって説明の仕方を工夫したり、お手本を見せたりしている。

- ・手つなぎコロコロ
- ・じゃんけん列車
- ・長縄くぐり など



写真2 ピョンピョンくぐり

4 みんなで一緒に「パブリカ」を踊る。

- ・園児と一緒に歌いながら楽しく踊る。

5 終わりの会をする。

- (1) 園児・児童の感想
 - ・5年生の司会でグループごとに
- (2) 終わりの言葉 (5年生)
- (3) 園児のお礼の言葉
- (4) 園長先生の挨拶

6 5年生が出口付近に花道を作って拍手で園児を送り出す。

- ・園児の立場に立って具体的に見本を見せながら説明するようにさせる。

- ・うまくいかない時やトラブルが起こった時には、グループで相談させたり協力させたりするなど、常に協働して取り組ませる。

- ・園児の様子を見ながら楽しい雰囲気の中で活動することができるよう声かけをする。



写真3 園児と一緒に活動を振り返る

- ・楽しかったことや気付いたことを発表し合い、充実感や達成感につながるようにする。



写真4 笑顔で園児を見送る

園児の気持ちを考えて声をかけたり遊んだりしている。

園児と仲良くなった自分に気づき、喜びを感じることができている。

(9) 実践を振り返って

事前に昨年度の実施計画をもとに幼稚園・小学校の担任が打合せを行ったことにより、5年児童の活動への思いや願い、園児の気持ちや様子を共有することができたので、円滑に本年度の計画を立てることができた。また、交流を始める前に、5年生が5歳児あてに手紙を書いたことが、小学生のお兄ちゃんやお姉ちゃんと一緒に遊ぶことへの園児の期待を高めることにつながった。

◇「まつ組さん・ゆり組さんに読み聞かせをしよう」…(7) 単元計画の活動ごとの感想より

5年生：初めはどう接したらいいか戸惑っていた児童もいたが、「こっちを見て集中して聞いてくれて嬉しかった」「〇〇くと仲良くなれて嬉しかった」「これからも楽しく一緒に遊びたい」と、今後の活動に対する多くの児童の期待と意欲が感じられた。

5歳児：「お姉ちゃんがとても優しくしてくれた」「〇〇さんの紙芝居おもしろかったよ」「お兄ちゃんの名前を覚えたよ」と、多くの園児が親しみと憧れを感じていた。

◇「まつ組さん・ゆり組さんと運動遊びをしよう・プールで遊ぼう」

5年生：「やり方やルールをきちんと聞いてくれて嬉しかった」「手をつないだり一緒に運動したりして本当の弟や妹みたいだった」「傍で手伝ってあげたら、ニコッと『ありがとう』と言ってくれた」「プールでおんぶしてあげたら喜んでくれて嬉しかった」と、さらに親近感や充実感を感じている児童が多かった。

5歳児：「お兄ちゃんの見本がすごくかっこよかった」「お姉ちゃんたちと一緒にパプリカを踊って楽しかった」「プールの向こう側まで浮き島に乗って運んでもらったのが面白かった」「もっとお兄ちゃんたちと遊びたかった」と大興奮で、園に帰ってから多くの園児が教えてもらった動きや遊びをまねてやっていた。

◇「まつ組さん・ゆり組さんと自分たちが作ったゲームで遊ぼう」

5年生：「僕たちが作ったゲームで楽しく遊んでくれて嬉しかった」「小さい子も楽しめるように工夫するのが大変だったけど、喜んでくれてよかった」「せっかく仲よくなれたので早く小学校に入学してきてほしい」と、園児が喜んでくれた達成感や6年生として迎える期待感を感じる児童が多かった。



写真6 自作ゲームで園児と楽しむ②

5歳児：「お兄ちゃんたちの作ったゲームすごかった」

「お姉ちゃんが優しく説明してくれたからすぐに遊び方が分かった」「小学校のこともいろいろ教えてもらったよ」と、小学生への憧れや入学への期待感を感じている園児が多かった。



写真5 自作ゲームで園児と楽しむ①

5. 実践の考察と提言

今回の交流活動を通して、5歳児には小学校への関心や親しみをさらに深めるとともに、5年生に対する憧れや入学に向けての期待感を高めることができた。また、5年生には自分たちが企画した交流を5歳児が喜んでくれたという達成感や相手意識を持って活動することの大切さを実感するとともに、4月には最高学年として5歳児たちを迎えるんだという自覚と責任感を持たせることができた。

今後は、探究のプロセスの中の「②情報収集」「③整理・分析」「④まとめ・表現」の段階で次のような工夫をすることにより、児童の主体性や創造性がさらに発揮され则认为。

②情報収集：幼稚園の担任と打合せをする段階から代表児童を参加させることにより、児童が自ら5歳児の生活の様子について話を聞いたり、好きな遊びについて質問したりする機会を設け、強い課題意識と目標を明確にした調査活動を仕組むようにする。

③整理・分析：代表児童が幼稚園の担任から聞き取った情報を5年生全体で共有し、その情報をもとに整理したり分析したりして、5歳児と交流するためのよりよい活動のあり方について思考するとともに、活動の過程でも常に自己評価・相互評価しながら改善していくことができるようにする。

④まとめ・表現：児童自らが今までの学びとのつながりを意識しながら交流活動全体を振り返り、担任教師や幼稚園の担任からの評価をもとにして、よりよい自分づくりのための新たな目標を明確にすることができるようにする。

また、今回の改訂で導入されたプログラミングを体験する場合においても、ただ自分たちでプログラムしたロボットや車で楽しく遊ぶという活動に終わってしまうことのないよう、児童に明確な相手意識や目的意識を持たせるとともに、探究のプロセスを通してプログラミング的思考をはぐくんでいくことが重要であるとする。

以上のように児童を主体においた探究のプロセスをさらに工夫することで、追究すべき課題が児童一人一人のものとなり、一人一人の児童に友達と協働してこの課題を解決したいという強い意志が生まれ、この学習のさらなる充実が期待できると考える。

さらに、幼小の接続をより円滑に強めていくためには、幼稚園での「学びの芽生え」から小学校での「自覚的な学び」への移行を滑らかに進める必要がある。小学校と幼稚園の双方で5歳児修了時までには育てたい具体的な姿と小学校入学の導入期で児童に身に付けたい力をすり合わせ、3歳児から小学校卒業までの9年間を見通した教育課程を創造していくことが望まれる。そして、特に行動や人間関係などに課題のある園児については、小学校と幼稚園の教師が常に連絡を取り合って意見交換するなど、共通の視点を持ってきめ細やかに指導・支援をしていくことにより、小学校に向けて滑らかに学びを高めていくことができるのではないかと考える。

6. おわりに

総合的な学習の時間は、他の教科等と異なりその具体的な目標や内容が学習指導要領には示されていない。そのため、各学校が地域や児童の実態等を踏まえて「どのような子どもを育てるのか」という目標を地域と共有し、その目標を実現するためのカリキュラムを学校が主体となって編成し、実行していくことが必要となる。そして、近隣の学校園はもとより、地域の人や施設、企業等に積極的に協力を求め、地域と一体となって取り組んでいくことでより実りある総合的な学習の時間が展開されるものと考ええる。

学習指導要領改訂の基本方針に挙げられた、地域の子どもたちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し連携する「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すうえにおいても、幼児期から児童期への円滑な接続を意識した連続性ある教育課程の中核として総合的な学習の時間が担う役割は、今後ますます大きくなっていくのではないだろうか。

注

- 1 文部科学省（平成 29 年 7 月）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社、P.5
- 2 同上、PP.8-17 PP.39-41
- 3 同上、P.5
- 4 同上、P.6
- 5 同上、P.9 の図より転載
- 6 同上、同ページ
- 7 文部科学省（平成 30 年 3 月）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、P.143
- 8 文部科学省（平成 22 年 11 月）『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議報告』P.10 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf（最終確認 令和 2 年 12 月 22 日）
- 9 前掲『幼稚園教育要領解説』、P.145

参考文献

- ・ 文部科学省（平成 22 年 11 月）『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）』教育出版
- ・ 文部科学省（平成 24 年 12 月）『初等教育資料 No.893』「特集 1 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の実際」東洋館出版社
- ・ 文部科学省（令和 2 年 2 月）『初等教育資料 No.990』「特集 II 問題解決的な学習が発展的に繰り返される探究的な学習の在り方」東洋館出版社